

展望

現在と過去との往還

鈴木 竹志

昏れる猿沢池さるおのいけ

アーケード抜けてひとりの星空を仰ぎぬ

冬の眼鏡はずして

冬ひだまりの桜井線にまどろめり南に向

かうラネーフスカヤ

この三首は「ラネーフスカヤ」だったわたし

へ」と題された一連七首中にある。この三首

を読みながら、現在と過去との往還というこ

とを考えた。読む側は現在にいて、作者の奈

良への旅という過去に向き合っている。それ

を往還と考える。往還が可能なのは、笠木の

歌に用いられている文語によるのである。例

えば二首目の「仰ぎぬ」を「仰いだ」に、三

首目の「まどろめり」を「まどろんだ」とし

たらどうだろう。往還は難しい。過去が過去

としての確かさをもたなくなる。それは、口

語のみで詠むと時間軸が曖昧になってしまう

こととも関わっている。そして、往還によっ

てこそ歌の抒情が生まれるのである。例えば

「懐かしさ」という感情が生まれてくるので

ある。口語のみだと往還による抒情を得るの

は極めて困難であろう。さきほど述べた時

間軸の曖昧さがあるからである。

笠木の音楽性と時間軸の確かさを求めた結

果としての文語の使用は、口語のみで詠む歌

人たちへの刺激となることを期待したい。

文語を用いず口語のみで短歌を詠む人々が

若い世代を中心に急速に増えている。何らか

の信念をもって口語のみで短歌を詠んでいる

というより、口語のみで詠むことが当たり前

のことだという認識があるように思われる。

つまり、文語は彼らの眼中にはないのである。

しかし、それは、明らかに文語というもののへ

の認識不足であるし、さらに言えば近代短歌

という貴重な蓄積に対する冒瀆とも言えるの

ではなからうか。ただ、若手の歌人の中にも、

口語の歌から出発したにもかかわらず、文語

を用いることへの拘りのない歌人たちが少な

からずいる。例えば、昨年の夏『はるかカー

テンコールまで』（港の人）を刊行した笠木

拓は、そういう歌人たちの中でもとりわけ文

語を取り入れて詠むことに拘りを持たない歌

人である。初期の作品には、やはり口語のみ

の歌が多いが、文語を全く使わないわけでは

ない。例えば、こんな歌がある。

ビニールの撥水加工うつくしと傘の内側

見ておりぬ

彼方へとトランベットは向けられて息は

心の速さを持ってり

もう冬の雨だよ窓の向こうにはりっしん

べんの降下止まざり

若い歌人の歌で「見ておりぬ」を見つけれ

ことはあまりない。私もさすがに「おりぬ」

は使わない。いかにも古めかしい。しかし、

どうやら笠木には抵抗感はないようだ。二首

目以降の歌も要となるところで、文語を用い

ている。文語を用いることへの抵抗感が無い

一つの理由として、笠木が歌の音楽性を大切

にしていることが挙げられる。笠木の歌は読

んでいて非常に心地良い。さらに声に出して

詠めば、それを実感できる。笠木は音楽性を

保つためには、文語も必要だと考えているの

である。口語だけだとどうにも間延びしたり

リズムになりがちである。笠木の歌にはそうい

う歌は少ない。あくまでも音楽性を追究した

いという意志があり、音楽性を保つためのツ

ールとしての文語という捉え方があるのだ。

巻末近くにはこんな歌がある。やはり要所

に文語を取り入れている歌である。

旅に来て購う古書のなつかしくみどり